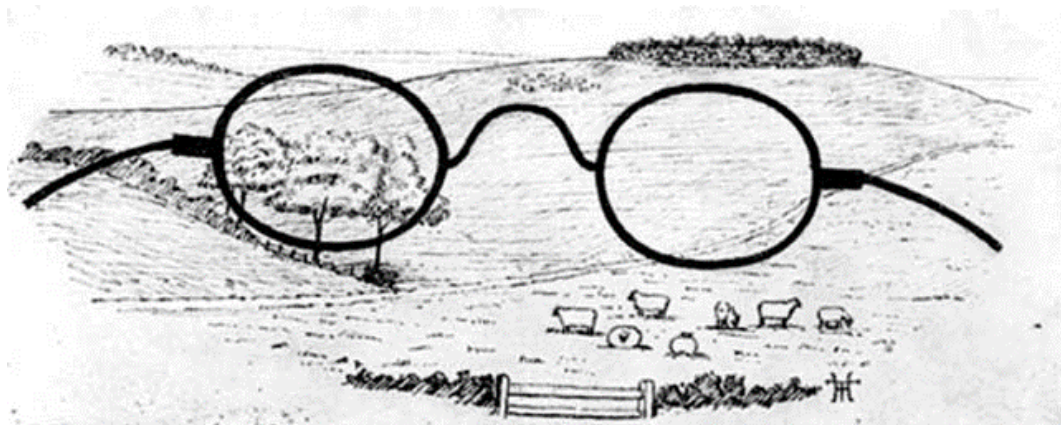


日本ハーディ協会ニュース  
NEWS from THE THOMAS HARDY  
SOCIETY OF JAPAN



第91号 (2022年4月1日号)

発行者 〒577-8502 東大阪市小若江 3-4-1 近畿大学経営学部高橋路子研究室  
日本ハーディ協会 jimmu.thsjapan@gmail.com  
編集者 麻島徳子 〒533-0007 大阪市東淀川区相川 3-10-62 大阪成蹊短期大学



Hardy's drawing for 'In a Eweleaze near Weatherbury' in Wessex Poems. (画像は編者による)

## 人物を配した風景画

北 脇 徳 子

マーガレット・ドラブルが「トマス・ハーディはおそらく英語で田園の生活や風景を書いたものとも偉大な作家だろう。」(ドラブル 95) と褒めたたえ、デズモンド・ホーキンスも、「人物を配した風景画」(Hawkins52) がハーディ小説の一大特色だと評している。確かに、農民と農村の風景を描くことにかけては、ハーディは一流作家である。彼の主要小説の中から、『緑樹の陰で』、『はるか群衆をはなれて』、『帰郷』、『森林地の人々』を取り上げて、「人物を配した風景画」を読み解いてみようと思う。

『緑樹の陰で』には、教会音楽の担い手が、村の聖歌隊からオルガンに移行されるという新旧の交代劇と、新任教師ファンシイを巡る3人の男性の求愛劇が描かれている。物語の舞台メルストックは、ハーディの生まれ故郷の上下ボッカムトンとスティンスフォード教会であり、作品に描かれる自然描写や農民の生活、田舎の風物詩はハーディの体験に基づいたものである。聖歌隊の弦楽器を受け持つ運送屋のデューイ家では、リンゴ酒が振る舞われ、村人たちの世間話の賑やかな語らいがあり、クリスマスのダンス・パーティがある。デューイ家は、村の文化の担い手であり、正直で誠実、勤勉で謙虚、自然と融和して暮らしている。息子のディックも、素朴な牧歌的な世界を体現する人物である。季節の推移と共に、ファンシイの気まぐれな恋の駆け引きに翻弄されながらも、地元の有力者シャイナーとインテリのメイボルド牧師に打ち勝ち、ディックはその実直な人柄で彼女の心を掴む。万物の生命を育ててきた老木の緑樹の下で、土地の音楽隊の演奏と田舎の踊りと歌に祝福されて二人の祝宴が行われる。この作品の風景画には村の伝統文化の継承が描かれている。

『はるか群衆をはなれて』は、悠久の時間が流れるウェザーベリーが舞台である。季節に合わせて行われる羊を洗う作業、羊毛刈り、麦の収穫などの牧歌的な農村風景が描かれ、麦におの火事や嵐の中で農産物を守るために自然と闘うオウクの姿が描かれる。オウクは200頭の羊を持つ牧場主から無一文になっても不遇を嘆かず、現実をしっかりと受け止め、冷静沈着な判断力と熟練した技術を生かし、忍耐強く運命を拓いていく人物である。トロイのような女たらしの派手さや、ボールドウッドのようにバスシバに結婚を迫る執拗さもなく、報われない愛を抱きながら、黙々とバスシバに尽くす。トロイの死後、オウクはようやく彼女と結婚して、名実ともに農場の主になる。バスシバを巡る3人の男性の求愛劇の背景には、全編を通して描かれる四季折々の農牧作業の風景と豊かな自然があり、おおらかに伸び伸びと働く田舎の人々の安定した農村社会がある。この風景画を支えているのがオウクである。

『帰郷』には、豊かな自然はない。舞台は荒涼とした不毛の原野であり、文明を仇敵とする原始の世界である。村人たちは異教崇拝と呪術信仰を持ち、非生産的なハリエニシダ刈りを生業としている。エグドン・ヒースは、小説の悲劇の中核をなしており、登場人物たちを呪縛し、彼らの運命を支配する力を持っている。エグドンを忌み嫌い、この牢獄から逃れようとあがく反逆者ユーステイシャは、スーザンの蠟人形の呪術の中で、堰の激流に飲まれて溺死する。ワイルディーヴもユーステイシャを救おうとして溺死する。息子クリムとユーステイシャの結婚に反対したヨーブライト夫人は、息子を呪いながらマムシに噛まれて荒野で死ぬ。村人を教化するという理想に燃えて帰郷したヒースの申し子クリムは、眼病を患い、初志を貫徹できず、母と妻を犠牲にし、野外巡回説教師となって生き残る。ユーステイシャとワイルディーヴのエグドン脱出は叶わず、ヨーブライト夫人は息子と仲直りできない。3人がエグドンで死に、クリムの理想主義は成就しなかった。

紅殻商人のヴェンは、全身が緋色でメフィストフェレス的な様相を帯び、彼だけがエグドンに自由に入出りできる。ヴェンはその愛他主義においてオウクの継承者であるが、作品での彼の役割はエグドンの代弁者である。暗闇の中、土ポタルの光でワイルディーヴとさいころ賭博をする場面やユーステイシャとワイルディーヴの密会を見張り、彼に威嚇射撃をする場面は不気味である。彼の行為のほとんどが裏目に出て、結果的には悲劇を誘発している。『帰郷』には、圧倒的な自然に翻弄される群像画が描かれているのである。

『森林地の人々』の背景となるリトル・ヒントックの森林地帯もまた、文明から隔絶された世界である。人間も森の木も過酷な生存競争に晒されている。森の住人ジャイルズとマーティ、都会から来たフィッツピアーズとチャーモンド夫人、この都会対田舎の対立図式の両方に属しているのが、ヒロインのグレイスである。物語はグレイスの結婚を軸に展開され、フィッツピアーズとジャイルズの間を揺れ動くグレイスに翻弄されたジャイルズの死、彼の死を悼み、彼に仕えてきたクリードルの追悼の言葉とマーティの鎮魂歌で終わる。ジャイルズは森の苗木を成長させる魔術師であり、森と知的交流ができる。人間社会においては敗北者であるが、森の精霊である彼の死を森全体が悲しむ姿、それはまさに哀切な一幅の絵である。

ハーディの作品には自然と一体となった豊かな田園風景だけが描かれているわけではない。エグドン・ヒースは荒涼とした不毛の原野であり、リトル・ヒントックも厳しい適者生存競争に晒されている。後期作品になると、フリントクム＝アッシュで過酷な労働に従事するテスの姿があり、ジュードを取り巻く自然も人間社会も残酷である。ハーディの風景画には、自然の豊かさと同時に厳しさも描かれているのである。

#### 引用文献

Hawkins, Desmond. *Hardy: Novelist and Poet*. London: Papermac, 1981.

ドラブル、マーガレット『風景のイギリス文学』、奥原宇/丹羽隆子訳、東京、研究社出版、1993年。

## ハーディと写真

金谷益道

日本でようやくコロナ感染の第五波が収束し始めた 2021 年 9 月初頭、一年間の在外研究のために到着したイギリスの様子は日本とは全く異なるものだった。街のどこに行ってもマスクをしていない人が大多数で、2020 年 3 月からずっと閉鎖していた劇場・映画館のほとんどは 2021 年 7～8 月頃フルキャパシティで客の受け入れを再開していた。研究受け入れ先のケンブリッジ大学の図書館もイギリスに到着する前に入館できるようになっていた。おかげで大学図書館ではパンデミック前とほぼ何も変わらない対面でのサービスを楽しむことがずっとできているのだが、閉館中に学生・研究者のために自宅からでもアクセス可能なデジタル資料の数をかなり増やしてくれていたため、電子ブック・電子ジャーナルを読む機会が日本にいた時より格段に増えた。図書館の中でも、紙媒体の資料ではなく自分で持ち込んだ PC の画面上でデジタル資料を読んでいる学生や研究者の姿が目立つ。

「本」ということばを聞いて、紙やインクや綴じ糸などでできたフィジカルな物体を真っ先には頭に浮かべなくなる時代が迫ってきているのではないかと——図書館の若い学生たちの様子を見ている時に巡ったこのような想像など馬鹿げた絵空事に過ぎないと思った人は、「写真」のことを考えてみてほしい。このことばから想像するものは、もはや世代間で随分異なっているはずだ。多くの若者にとって、「写真」とは、像を焼き付けた薄い印画紙ではなく、PC やスマホのスクリーンの中

に存在するものとなっているだろう。スーザン・ソントグは『写真論』で映像が「物体」になっていることを写真の特性だとみなしたが、それはもはやある特定のタイプの写真にしか当てはまらない特性になってしまったと言えよう。

ハーディや他のヴィクトリア朝作家の作品に度々登場する写真を題材にして批評をする際に忘れてはいけないのは、その写真が一体どの時代の、どのタイプのものなのかを特定することだ。現代のある年代の人たちが真っ先に思い浮かべるに違いない「薄い印画紙」を写真の普遍的な姿だと決めてかかって批評を行うのは、軽率のそしりを免れないだろう。ハーディが生まれた日から遡ること約十ヶ月前に公式に発表されたルイ・ダゲールが生み出した技法で撮られた写真—ダゲレオタイプ—から、旅行者たちにそのレンズを向けられることへの嫌悪を表明したコダック製カメラのスナップ写真まで、ハーディが生きていた時代には様々なタイプの写真が存在した。世界最古の写真とされるダゲレオタイプでは、像は紙ではなく、銀メッキをした銅板など金属の上に定着していた。ハーディの *Jude the Obscure* に登場する、Phillotson がキスをした Sue の写真や、短編小説 “An Imaginative Woman” で主人公 Ella Marchmill が夫に見つからないように枕の下に急いで隠した、(実物を一度も目にすることがない) 詩人 Robert Trewe をとらえた写真は紙であるが、薄っぺらなものではない。それらは、“pasteboard” (*Jude*) や “cardboard” (“An Imaginative Woman”) という語に置き換えられているように、台紙となる厚みのある板紙と印画紙が一体になったものだ。(三世紀に渡り経営を続けているケンブリッジの古書店で買った 1890 年代に撮られた “cabinet card” と呼ばれた写真は、0.1cm ほどの厚みがあった。) 亡くなった前夫の等身大の彫像を現在の夫から隠すために使った “Barbara of the House of Grebe” のヒロインのクローゼットを連想させる枕の下という狭い空間で、Ella の夫の頭の重みに反応して Trewe の写真がぎしぎしと音を立てるのは、この厚みのおかげだ。

写真を「複製技術時代」の代表とみなしたヴァルター・ベンヤミンのごとく、「複製性」を写真の特性だと考えている人も多いだろうが、それはどのタイプの写真にも当てはまる普遍的特性ではない。Phillotson がキスをした Sue の写真は、“a duplicate of the one she had given Jude” と書かれているように、複製をネガからいくらかでも生み出せるタイプの写真だったが、最古の写真であるダゲレオタイプは、複製をつくる元となるネガがない、いわゆる「一点もの」だった。(ちなみに、*The Well-Beloved* に登場する初代 Avice の姿をとらえた写真は、“in the primitive days of photography” につくられたと記されているが、ダゲレオタイプではなく、コロジオン処理されたネガからつくられたものであり、複製を生み出せるタイプの写真である。) 多くの複製があることが暗示されている Sue の写真は、「被写体の髪、肌、衣服、まなざしなどから直接発せられた光線の宝庫」といった、ロラン・バルトが『明るい部屋』で示した写真の定義にはそぐわないものなのだ。

容易に複製をつくれるデジタル写真が圧倒的主流になってしまった今の時代においては、「一点もの」といった特性は写真からほとんど完全に剥ぎ落とされてしまっていると言うこともできるかも知れない。しかし、複製性が写真の永劫不変の特性として今後認識され続けていく保証などない。実際、ブロックチェーンの技術を用いた NFT (非代替性トークン) の写真のように、デジタルデータでありながら「一点もの」の価値を付与された写真も珍しくなくなってきている。この話題に興味を抱いた方は、写真—特にデジタル写真—の定義を更新する NFT のデジタルアートを制作・販売する YellowHeart 社のホームページを見て頂きたい。それは、NFT デジタルアート界の現状を教えてくれるだけでなく、自分が慣れ親しんだ写真の姿や特性が写真の無時間的な唯一の姿や特性

なのだという、批評家が避けなければならない思い込みからあなたを解き放ってくれる助けともなるかも知れない。

## “Nature’s Questioning” と Allen Tate、

### そして J. Hillis Miller

西村 智

昨年（2021年）2月に逝去された J. Hillis Miller 氏は、私が彼の勤務校（University of California, Irvine）の大学院生だった時に指導教授を務めてくれた（1996 - 2003年）。以下では、当時を振り返って、Miller 教授のセミナーの一つを受講した時に提出したタームペーパーのことを述べたいと思う。

それは1998年春学期に開講された“Aesthetic Poetry: From Tennyson to Yeats”という題目のセミナーで、概要は次のようなものだった。

This course will read selected poems by a series of late nineteenth-century English poets (more or less 1860-1900), along with ancillary prose . . . . “Aesthetic Poetry” is Walter Pater’s name for William Morris’s poetry and, more generally, for all English poetry of the late nineteenth century. . . . My guiding questions will be: What is the relation, if any, between “aesthetic poetry” and “aesthetic ideology”? Is the first a version of the second? With speech act theory in mind, I ask what was such poetry intended to *do* (as opposed to conveying information)? . . . Is “aesthetic poetry” a way of doing things with words? . . .<sup>(1)</sup>

上記の引用では省略したが、リーディングリストには Hardy も (“early Thomas Hardy”として) 含まれていた。私がこのセミナーでの口頭発表とタームペーパーで取り上げたのは Hardy の抒情詩のいくつかで、特に“Nature’s Questioning”を詳しく論じた。この詩を中心に据えたのは、それを最初に読んだ時の自分の反応を突き詰めれば、セミナーのテーマに沿うものになるのではないかと思ったからである。

その反応というのは何らユニークなものではなく、おそらく“Nature’s Questioning”の読者の多くが様に抱く、「これは自然描写の詩ではない」という印象である。ただし、そのような印象を持つ人たちも、「自然描写の詩であろうとして、それに失敗している」と感じる人たちと、「そもそも自然描写の詩ではない」と感じる人たちの、二手に分かれるにちがいない。私がこの詩を論ずる際に出発点を与えてくれた Allen Tate は、前者の一人だったと思われる。“Hardy’s Philosophic Metaphors”と題した論文の中で、彼は“Nature’s Questioning”の比喩の使い方に注目し、それが自然をありのままの姿から遠ざける結果になっていると述べている。



[The natural objects in the first stanza] quickly become school children, before they have been sufficiently particularized to be themselves. The transformation of the natural objects into persons is initiated with some degree of tact in terms of simile—“Like chastened children”—that we can accept because not too much is claimed for it at that stage. But in the second stanza what appeared to be simile becomes completed metaphor. We have here, in the terms of Mr. I. A. Richards, an instance of metaphor in which the “vehicle” replaces the “tenor”: the natural objects (tenor) are so weakly perceived that the children (vehicle), who appear as the conveyance of their significance, cancel out the natural objects altogether . . . .<sup>(2)</sup>

確かに、tenor が vehicle に置き換えられてしまうような隠喩は、不出来であるかどうかは別として、少なくとも範例的な隠喩であるとは言えない。しかし Tate が批判するそのような vehicle の前景化は、実は隠喩とは区別されるものとしての擬人法 (personification もしくは prosopopoeia) の顕著な特徴の一つなのである (極端な例で言えば、“leg of a table” という擬人法は隠喩と見なされるかもしれないが、そこでの tenor は“leg” という vehicle 以外に本来的な表現を持っていない)。こうなると問題は、擬人法を一つの独立した文彩として認めるかどうかにある。私は自分自身の答えとして、“Nature’s Questioning”の中心的文彩は直喩でも隠喩でもなく擬人法であり、自然を“chastened children sitting silent in a school” (4行目) と見ることににおいてはもちろん、“lonely tree” (2行目) や“Life and Death are neighbours nigh” (28行目) など、Tate が注目しないところにもそれが存在していると論じた。

実際、Tate を含め、何らかの形で擬人法を軽視する批評家は少なくない。例えば、John Ruskin にとっては、それは真実を歪める“pathetic fallacy”であり、あるいは Paul de Man が言うように、Victor Hugo の“*Écrit sur la vitre d’une fenêtre flamande*”を読む Michael Riffaterre にとっては、現実を描写する際に用いられがちな「陳腐な」言い換え表現にすぎない<sup>(3)</sup>。Tate については、私のタームペーパーへの Miller 教授のコメントの中に、次のような指摘がある。

He [Allen Tate] was a Catholic critic and poet himself, not all that sympathetic to Hardy. His reading also shows the limitations of the so-called “new criticism” as it focused so exclusively on metaphor and did not have, for example, much wisdom or insight about prosopopoeia.

その一方で、de Man や Barbara Johnson らと同様、脱構築批評家としての Miller は擬人法の重要性を一貫して強調する。私のタームペーパーへのコメントにおいては、次のような言葉でそれを述べている。

It is not possible to say it [prosopopoeia] is merely a fiction, since no other language exists, or, at any rate, it is extremely difficult to expunge latent prosopopoeias from language even of the most literal and “unpoetical.”

その後も引き続き Miller 教授の助言を得ながら書き改めたこのタームペーパーは、私の博士論文の一章になると同時に、“Thomas Hardy and the Language of the Inanimate”というタイトルで学術誌にも掲載された<sup>(4)</sup>。

## 注

<sup>(1)</sup> University of California, Irvine, *Graduate Offerings in English and Comparative Literature: For Spring Quarter 1998*, pp. 2-3.

<sup>(2)</sup> Allen Tate, “Hardy’s Philosophic Metaphors,” in *Collected Essays* (Denver: Alan Swallow, 1959), p. 193.

<sup>(3)</sup> Paul de Man, “Hypogram and Inscription,” in *The Resistance to Theory* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1986), p. 47.

<sup>(4)</sup> Satoshi Nishimura, “Thomas Hardy and the Language of the Inanimate,” *Studies in English Literature 1500-1900* 43.4 (Autumn 2003): 897-912.

# ハーディと大学英語教育

## —ハーディと私、その後—

杉 村 醇 子

文学作品、特にハーディ文学は、原典の精読に面白さがあるが、コミュニケーションや資格試験対策を重視する授業で、文学作品の精読を中心にするのは難しい。しかし幸いなことに、英米文学の代表作、特に19世紀小説は、学習者が習得すべき文法や語彙で構成されたリトールド版が数多く出版されている。ハーディ作品も、*The Withered Arm* (Oxford Bookworms)、*Far from the Madding Crowd* (Oxford Bookworms、Penguin Readers および Macmillan Readers)、*Tess of the d’Urbervilles* (Oxford Bookworms および Macmillan Readers)、*The Trumpet Major* (Macmillan Readers)等が出版されている。本来、これらの Graded Reader は多読に用いられる。しかし文学作品は上位レベルで再録されることが多く、担当学生にとっては、原典ほど難解ではないものの、文法・語彙の点でやや高度であったため、多読用ではなく通常のリーディング教材として、卒業研究と語学授業で活用してきた。

卒業研究では、当初、様々なテーマの文化研究も認めてきたが、私自身が社会学や歴史学の研究手法を専門的に習得していないため、「自由研究」の指導になっていないかと悩んでいた。その日々の中、初代の卒業生から「学生時代、1冊をじっくり全部読めて良かった」との言葉をかけてもらった。私自身、オーソドックスな文学研究の手法（テキストを読み込み、先行研究を調査反駁した上で立論し、自説を展開すること）は、実学に部分的でも関連している（経営に関する資料を読み込み、他社の動向を分析調査し、その上で新たな企業戦略を提案する等）と、また最新のビジネス知識を提供できずとも、文学研究を通じて異文化への「態度・志向性」を養うことにより、少しは彼らの将来に貢献できるのではないかという思いから、現在は文学作品を中心とした卒業研究指導を行なっている。昭和生まれの教員と異なり、普段、TikTok や Instagram、You Tube での短い動画に慣れているため、映画に関心を示さないのは残念であるが、Graded Reader を主に、原典を併用して卒業研究に取り組み、時には独自の見解を披露してくれる。

語学授業でも Graded Reader を通して、学生はハーディ文学に惹きつけられる。以前、一般的なリーディングの授業で Macmillan Readers の *Tess* を使用した際は、授業を3つのモジュールに分け、原典の精読に約30分、リトルド版に基づくワークシート学習（TF quiz や Graded Reader の表現を用いたライティング）に約30分、最後に既習箇所德音読・発音練習等の音声タスクを約20分の割合で実施した。学期終了後、幾つかの発見があった。第一に原典の精読を楽しんでいた点である。以前、TESOL の理論を学んだ際、一部の研究者が文法訳読式教授法を痛烈に批判する一方、限定した時間で取り入れるならば第二言語習得に有効とする先行研究を知った。この知見に勇気を得て、集中力が比較的高い授業の冒頭に限定して導入した。週1回約30分、ヴィクトリア朝文学に触れることを「大学っぽいから良いと思う」との感想には苦笑したが、学生にとっては馴染みある学習法であり、同時に辞書を用いた多量の意味確認の予習を伴い、会話授業とは異なる学習効果があったように思う。次に驚いた点は、Graded Reader で毎週、読み進めるうちに、*Tess* という作品自体に受講生が興味を示した点である。研究者として作品に接する時は、特定の人物にのめりこむことはないが、読者としての学生は、ヒロインへの感情移入をためらわない。同年代でもあり、彼らは「ありえない」「かわいそう」とお気に入りのキャラクター、テスに依拠して読解することになった。さらに最も印象に残った学生の反応は「話の続きが気になる」であった。初回に「とんでもない最後になります」とだけ告げて、結末は明かさなかったが、エンジェルのブラジル行き、テスの困窮生活など、次第に作中に不穏さが充満するにつれて、学生たちは、いささかナイーブにも、その展開に関心を持ち続けてくれた。絨毯の下の読まれなかった手紙など、ハーディ特有の企みは、恣意的であると批判されもするが、一読者として純粋に「ドキドキ・ハラハラ」の展開に引きつけられる姿は、そのような読み方を久しく行っていなかった私にとって、新鮮であった。

考えてみれば、学生が *Tess* に示した「続きが気になる」という反応は文学の根源的な魅力に由来するのかもしれない。先生方は「かいけつゾロリ」シリーズをご存知だろうか。ベストセラーの児童書で、人気の秘密は、楽しいイラストとともに、巧みな物語の展開である。作者の原ゆたかは「本の特性であるページをめくる楽しさを知ってもらいたい」と語る。「続きはまた明日ね」が通用せず、「もっと、もっと」とせがまれ最後まで読むはめになるたびに、この「続きを渴望させる力」は文学独自のものと（翌朝の仕事に気がしつつ）痛感したが、この情熱は読解の原動力となる。もちろんリトルド版そのものに批判もあり、筋書きの面白さは分かりやすい魅力の一つにすぎない。また、そもそもハーディ研究の醍醐味は、特に後期作品に顕著に見られる多面性や両義性、さらには再解釈を何度も迫る変容する意識に切り込むことにある。しかし英語教師としては、原典でエッセンスを味わいつつ、Graded Reader を活用し「ここの文法、TOEIC に出ます！」と声かけしながら、同時に起伏に富むハーディの物語をこれからも学生とともに楽しみたい。

## ハーディとの縁：フロレンスの手紙

河井純子

私が日本ハーディ協会に入会したのは大会のシンポジウムに加えて頂いたのがきっかけで、五年ほど前のことになる。もともとトマス・ハーディが専門ではないこともあり、その後、会員の



皆さんと交流し、教えを請うことができる機会を生かすことのないまま、これまでの年月を過ごしてしまった。協会の『ニュース』に寄稿しないかというお誘いを頂いた時も、自分のような者は書くことがないのでお断りするしかないと一旦は考えたが、それがやはり書こうという気持ちになったのは、ひとつ思い出したことがあったからだ。とても研究の「ニュース」とは言えないが、以下そのことについて書かせて頂く。

十年と少し前になるが、いまは亡くなられた大榎茂行先生が、甲南女子大学図書館のために購入されたハーディ関係のコレクションの一部を整理されたことがあった。『ニュース』七十号に大榎先生がそれについてお書きになっているので、ご記憶の会員もおられるだろう。コレクションの中心になるものは、二人目のハーディ夫人フロレンス・エミリの書簡二十八通である。大榎先生がそれらを整理し、学生たちのために和訳を付け、解説する作業をなさった折に、私も少しだけお手伝いをした。短い、社交的な内容のものではあるが、トマス・ハーディ自身の手紙も二通含まれていたうえ、そういう経験のほとんどなかった私にとっては、百年ほど前に遠いイングランドで遣り取りされていた手紙を手にとって読むというだけでも、じつは興奮させられることだった。恥ずかしながら最初は、小さな二つ折りのカードのような便箋に書かれた手紙の第二面がどこなのかさえ、すぐにはわからなかったことを憶えている。浮かれていては私の素人ぶりに大榎先生が不安を抱かれると思い、なるべく冷静に、点のひとつも見落とさないようにと注意深く読んだつもりではあったが、手書きのものを読み慣れない者にとって簡単な作業ではなく、先生の和訳第一稿がなければどうにも理解できない箇所もあった（会員の皆様はよくご存じであろうが、ハーディとフロレンスの筆跡が読みにくいものだったということではない）。

この機会を得てもう一度、件のコレクションの書簡に目を通して見た。ハーディの二通はレイディ・ジューン宛とエセル・イングリス（以下、イングリス夫人）宛で、前者はその日彼女に会えなかったことを残念がり、日曜日（四日後）にはぜひ会いたい、と伝えたもの、後者は相手から贈られたショールの礼状である。そしてフロレンスの二十八通はすべてがイングリス夫人宛で、内容は親しい友人へ向けた近況報告である。ハーディと妻フロレンスの生活が垣間見えるところや、夫妻と友人、知人、著名人たちとの交わりが記されたところなど、大榎先生がすでに書簡の中の興味深い点をいくつか紹介しておられるうえ、残念ながら私には、その内容やタイミングが専門家にどんな情報を与えるか判断ができないので、ここでは当時の作業を振り返り、また今回書簡を読み直しての、門外漢としての感想を書くことしかできない。私にとってフロレンスの書簡は、芸術家であり著名人であると同時にふつうの高齢者でもある夫の妻、パートナーである中年女性（二十世紀初頭ならば、三十代後半の女性は自分のことをそう認識したのではないだろうか）が、心配事を抱えながらの忙しい日々を友人に書き送ったものとして、興味深かった。と言っても、彼女の文面に慌ただしさが感じられたというのではない。彼女の肩にかかる大小の責任の数多いであろうことは察せられたが、それを静かに受けとめている態度で、日々の出来事やそれに対する夫ハーディや彼女自身の反応が書かれている。相手のイングリス夫人をフロレンスもハーディも信頼していることは間違いなさそうだが、誠実で気遣いのある、率直でもあるが同時に抑制の効いた手紙だと感じられた。フロレンス自身のキャリアを知るとそのことが私にはやや意外だったが、後に『トマス・ハーディの生涯』の同時期の記述を読んだ時、誠実で控えめというのは、この頃のハーディが周囲の人びとに与えていた印象と似たところがあるのかもしれないと思った。むろん、この時代の人として著名人の妻として、これらの手紙がイングリス夫人以外の人に読まれる可能性にフロレンスがまったく無頓着であったとは考えにくい。

私信を覗き見るのは後ろめたさと喜びを同時に感じる行為だが、上のような理由で私はあまり前者を覚えずに済んだように思う。いま読み返すと、より大きな行動の自由を持つイングリス夫人をフロレンスが羨ましがるところは、正直な気持ちが表れていて好感を持つし、ある箇所まで書いたところで、続きをどう書くつもりだったか忘れてしまった、などという記述を読むと、(フロレンスは違う理由で何かをごまかしたかったのかもしれないが) 近ごろ忘れっぽくなった自分と勝手に重ね合わせて嬉しくなったりもする。また、彼女のドイツ兵に対する印象、そして戦争が終わったことへの思いが書かれているところも興味深かった。ほかに印象に残った箇所と言えば、シャーロット・ミューやT.E. ロレンスへの賛辞だろうか。夫ハーディを始めとする、天与の才能や美しい資質を持った人たちへの、彼女の敬意と憧れは本物なのだと感じた。

以上、素人らしい、的外れかもしれない感想を書いてきてしまったが、それは、弟子でもなくハーディ研究者でもない私に声をかけてくださった大槻先生や十九世紀文学研究の先輩方が、ハーディと私との(かなり細い糸だが)縁を繋いでくださったことに感謝したい思いがあったからだ。今回遅ればせながら、一昨年四月のネット上のニュース記事で、フロレンス・ハーディの手紙が新たに「発見」され、ドーセット・ミュージアムのコレクションに加えられることになった、というものを讀んだ。関連して、トマス・ハーディ宛の書簡のデジタル化が進められていたことも、今ごろ知ることになった。システムティックに整えられた膨大な資料がさらに加わり、ハーディ研究を豊かにしていくことを考えると、圧倒される思いだ。ハーディ研究者は恵まれてもいるが大変なのだ、と他人事のように言って怠けているだけでは、私も許されないかもしれない。

## ハーディと私

丹野海晴

コロナ禍という息苦しい状況が続く中、一人机に向かって坐っていると、ふとした瞬間に「なぜ自分はまだ働いていないのだろうか」と自問してしまう。まだ博士前期課程二年なのだから当然のことではあるし、高校で非常勤講師をしているので全く働いていないわけではない。しかしながら、大学を出て就職した友人たちと比べて「取り残されている」という意識が絶えない。私はなぜハーディを研究するに至ったのだろうか。そもそも、なぜ大学院に進学しようなどと考えたのだろうか。

高校二年生か三年生の頃、まだ大学院がどのような機関なのかも知らない時代に、漠然と大学院に行きたいという考えがあった。ジュードのような本の虫でもなく、部活動に明け暮れていた高校時代の私には文学との縁などまるで感じられなかった。英語が得意であったし、何より当時担当だった英語の先生に憧れていたため、将来は高校の英語教員になりたいと思っていた。大学院への思いはどうした、と当時の私に訊いてみたくなる(当然、専修免許のことなど知る由もない)。結局大学は英文科に進み、一年次は学費のためのアルバイトとロンドン短期留学であったという間に過ぎていった。しかし、二年次に一つの転機を迎えることになる。

学部二年生向けに開講されていたイギリス文学史の講義を受け、私は「この先生しかいない」と直観し、講義の後に先生の許へ駆け寄った。「先生、大学院に行きたいです！」おおい、英語の教員はどうしたと更に訊いてみたくなるが、先生は私の顔と名前をすぐに憶えてくださった。

その後、先生の SNS のアカウントを突き止め、翌週の講義の後に「友達申請しても良いですか」と訊きに行った。先生のお名前ウェブ検索して偶然発見したのだが、今考えると恐ろしいことである。若気の至りにも程がある。しかしながらこの若気の至りが私を大学院の世界に導いてくれたと言っても過言ではない。というのも、後日先生がこの SNS の機能を使って「大学院の集中講義に出てみないか」と誘ってくださったからだ。私は喜びのあまり舞い上がった。こうして私は夏の集中講義に出席することになった。

集中講義にいらしたのは平石貴樹先生と諏訪部浩一先生であった。平石先生の講義ではフォークナーを、諏訪部先生の講義ではカーヴァーの短篇を読んだ。イギリス文学でこそなかったものの、私はこの二週間で初めて文学研究の何たるかを知った。幼いジュードが古典語文法の難解さに驚愕したように、小説を「読む」とはこういうことなのか、と衝撃を受けた。大学院に行きたいという曖昧模糊とした感情はこのとき確固たる信念へと変貌し、私は文学研究を志すようになった。

ハーディとの出会いは 2017 年 12 月、夏の集中講義に出た年の暮れのことである。文学史や講義の講義を基礎としながら、私は英米様々な作品を読むようになっていた。一人で作品を読み漁る中で新たな刺戟を欲したのだろうか、私は学会に興味を持つようになった。かの文学史担当の先生に相談してみたところ、院生と一緒に試してみようという、とのこと。この院生の先輩は先の集中講義の正規の受講生である。夏に連絡先を交換していた私は早速先輩に連絡を取り、東北大学で開催された日本英文学会東北支部大会に連れて行ってもらうことになった。どんな服装で行けばいいのかもわからず、とりあえず高校の卒業式用に購入したスーツを着て会場に入った。そこで「たまたま」原雅樹先生のご発表を拝聴した。『協会ニュース』83 号の原先生の記事にもある通り、それはハーディの『森林地の人々』に関するご発表であった。まだ学部二年生の私に原先生の緻密で驚きのある議論を理解できるはずもなかったが、手元にあるご発表の資料を開いてみると、熱心に書き込みがされている。私は原先生のご発表によってハーディの存在を知り、この作家に心惹かれたのだ。まずは有名な作品を読んでみようとして『テス』を読んだ。ハーディの英語に慣れず、苦心して読んだことが思い出される。それは強烈な読書体験であった。テスが傷つけられる度に心が痛んだ。学部二年生なりに「ハーディはどうしてこのような小説を書いたのか」が気になり、講義のレポートの題材にもした。私はハーディの虜になっていた。

卒業論文は『テス』で書いた。あの小説が脳裡に焼き付いており、どうしても自分なりに分析・解釈してみたかったのだ。現在は『ジュード』を中心にハーディの小説を研究している。まだ研究の足場も方向性も定まっていな中で私の研究の原動力となっているのはやはり「ハーディはどうしてこのような小説を書いたのか」という疑問である。時おり冒頭で書いたような淡い不安に襲われることがあるが、以前指導教授に言われた「基準は自分だ」という言葉を胸に日々ハーディと向き合っている。言うまでもなく、この指導教授こそが私を大学院へと導いてくださったイギリス文学史担当の先生である。声をかけてくださった先生に感謝するとともに、あまり褒められたものではないが、己の怖いもの知らずな行動にも感謝しようと思う。

# 第 64 回大会印象記

永 盛 明 美

日本ハーディ協会第 64 回大会は、2021 年 10 月 30 日（土）、事務局のお世話により今年度もオンライン形式（Zoom）で開催された。まず、庶務委員長の今村紅子氏により開会の辞が述べられ、その後、午前の部では 2 名の研究発表が行われた。

最初に、石井有希子氏の司会のもと、原雅樹氏が『「ダーバヴィル家のテス」とマゾ的主体性』と題し、ハーディがリベラリズムとは別の方法で自由を再考しようとしているという作業仮説のもと、*Tess of the d'Urbervilles* (1891)におけるテスと社会の性規範との関係を考察された。教育により当時のドメスティック・イデオロギーを内面化したテスは、性規範の中に徹底的に没入し、模範的な貞淑な妻として、ダブル・スタンダードを持つエンジェルを愛し続ける。しかしながらそれゆえに、社会秩序の基礎である法を、殺人という行為で犯すに至る。逆説的であるが、性規範は、テスにおいて徹底的に内面化されることでむしろ国民国家への脅威となってしまう。ここで原氏は *Deleuze* の『ザッヘル=マゾッホ紹介』よりマゾの主体性の議論を重ね、ハーディは、同時代の性のダブル・スタンダードを改善すべき社会問題として提起しているのではなく、むしろ、性規範を受け入れることでかえってそれを転覆するという、「主体性なき自由／マゾの主体性」と名づけられるようなオルタナティヴを描いているのだとし、それによりハーディの「悲観的マゾヒスト」としての一面をとらえることができると結論付けられた。

つぎに、坂田薫子氏の司会のもと、西村美保氏は「ヴィクトリア朝の飲酒をめぐる文化的コンテクスト—ハーディ小説における飲酒の表象—」と題して、*Far from the Madding Crowd* (1874)、*Tess of the d'Urbervilles*、*The Mayor of Casterbridge* (1886) の飲酒の場面に焦点を当て、飲酒の表象とプロットにおける機能性について考察された。はじめに、19 世紀の労働者たちを取り巻く飲酒問題を中心に、禁酒運動や法規制の政治の流れを概観された。次に、*Far from the Madding Crowd* におけるジョゼフ・プアグラスの寄り道や *Tess of the d'Urbervilles* のテスの父親と *The Mayor of Casterbridge* のヘンチャードの飲酒癖に着目し、酔っぱらいの描写がプロットに悲劇性と喜劇性を与えていることを分析され、こうした場面には労働者階級への飲酒をめぐる社会的圧力や規制が反映されていると述べられた。そして、ハーディの描く飲酒の場面には、当時の議員や証言者たちの想像を超えた、飲酒そのものを楽しみ、男性社会の社交を楽しむ労働者たちの実態が鮮明に描き出されていると結ばれた。今日の、COVID-19 の影響で感染対策として酒類提供の規制が断続的に行われている日本の状況もあり、飲酒と社交に焦点を当てた示唆に富んだご発表であった。

昼食をはさみ、午後の部は事務局長の高橋路子氏の司会により総会が行われ、会計報告、編集委員会報告、次期大会についての予告などがなされた。Zoom セミナー実施や、2021 年 9 月合同研究会準備大会や今後の合同研究会開催に関する報告等が行われ、審議事項として、『日本ハーディ協会ニュース』のデジタル化、ハーディ協会編の論文集出版企画等が承認された。

その後、3 人の講師による「Thomas Hardy と知の“dialogue”」と題されたシンポジウムが行われた。最初に、舟川一彦氏は「ヴィクトリア時代の宗教思想」と題し、ハーディの作品の全般的背景として、19 世紀の英国国教会内における思想の趨勢を分析された。まず、19 世紀の国教会内にあった福音派、アングロ・カトリック派、リベラル派の 3 つの勢力の定義、当時の評価を整理さ

れた。*Jude the Obscure*の中でハーディが、Kebleを“the poet”、Puseyを“the formularist”、Newmanを“the enthusiast”と呼び、オクスフォード運動の指導者たちの微妙な区別だてをしていることを指摘され、アングロ・カトリック運動が ritualism へと重点を移していく過程を分析された。*Jude* 第6部第3章で登場する St. Silas 教会のモデルである St Barnabas 教会について、貧しい労働者の多いこの教区でスーがアングロ・カトリシズムに強烈に感化される場面は、当時の国教会の情勢の反映であると述べられた。*Jude* において、クライストミンスター大学は因習的で特権階層以外を拒絶するかのような印象を与えるが、実際には、19世紀の英国の大学は制度的にも思想的にも大きな変革がなされ、密接に連動していた教会から次第に離れ、世紀の終わりにかけて国家の一機関へと変質していた。こうした変化を背景としてみると、ジュードのアングロ・カトリシズムから自由思想への変化、スーの自由思想からアングロ・カトリシズムへの立場変更は例外的現象ではなく、当時の少なからぬ英国人が経験した現実を反映したものであると結ばれた。

次に、永富友海氏は「【小説編】 Emotionally Craving for Her Body/Mind in *Jude the Obscure*」と題し、はじめに、宗教、性の言説と結婚制度という共通項を持つ *Tess*、*Jude* において肉体的交渉が個々人の道徳心や信仰心といかに強固に結びついているかをハーディが強調していることを指摘された。テスがエンジェルに死後の世界について語る *Tess* 第7局面第58章は、エンジェルのブロード・チャーチという宗派の問題、ポジティヴィズムという教義の問題、法律の問題などとともに、body と mind というデカルトの二元論の発想がハーディによる fictionalization の効果として用いられていると分析された。さらには、テスの肉体とライザ・ルーの精神が二分化され、「半ば少女で半ば女性の段階にあり、テスを霊的にした姿」をしたライザ・ルーによって物語の結末はテスの肉体の罪が贖われるという構造へと至ると述べられた。こうした body と mind の対立は、スーとフィロトソンが性的関係を再び結ぶ *Jude* のクライマックスにおいても描かれる。精神と肉体を切り離して肉体のみを提供しようとする痛ましいスーの姿はそれゆえに、彼女が間違いなく精神と肉体の両面から成立する人物であるという事実を示すものであり、*Jude* において“sexual”と同義で用いられる“emotional”という言葉で、“loving-kindness”を求めるジュードの渴望をすくい上げようとしたハーディの fictionalization の試みと呼応するものであらうと結ばれた。

最後に、松村伸一氏が「1860年代における詩人ハーディの自己形成：Philology, Prosody, Illustration～*Wessex Poems*をめぐって～」と題して、Victorian philology、Victorian prosody、Victorian book illustration の3つの領域からなる知のネットワークの中で、ハーディが詩人としての自己を形成する過程を探求された。Victorian philology の展開として、Linda C. Dowling の見取り図を概観し、new philology の発展と学術的意義、その成果の頂点である *The Oxford English Dictionary* (1884-1928) 出版について整理され、new philology の成果を経て新しい文学言語の可能性をハーディも見出していたと評価する Dennis Taylor の論考に松村氏も同意を示された。次に、Victorian prosody の展開として“English Metrical Critics” (1857)をはじめとした Coventry Patmore の韻律論を辿られ、Patmore の韻律論がハーディに影響を与えた可能性を指摘された。Victorian book illustration の領域では、言語テキストの客観的相関物としてのグラフィック作品を制作する姿勢がイラスト芸術の質的向上に寄与したことを述べられ、*Wessex Poems* 巻頭に置かれた挿絵付きの詩“*The Temporary the All*”に分析を加えられた。*OED*に用例を多数とられているこの詩は、11音節が3行、5音節が1行で1スタンザを成すという特殊な形式をしており、alliteration を使用し脚韻を用いていないという点で、「alliteration を用いた詩であれば脚韻を用いる必要はない」とした Patmore 流 alliteration 詩の典型であると述べられた。



シンポジウムの後、風間末起子氏の司会のもと、「The Crimes of Grimes: George Crabbe と Benjamin Britten」と題して、水野眞理氏による特別講演が行われた。まず Crabbe の “Peter Grimes” に詳細な分析を加えられ、Crabbe が人間の心理に目を向けるリアリズムに重点を置いたことを指摘された。次に、Britten 版 *Peter Grimes* と Crabbe 版 “Peter Grimes” の比較考察へと移られた。Crabbe の “Peter Grimes” は Grimes 以外ほとんどが名前のない人物で占められるために、オペラへと作り変えられる際に、原作にはいない登場人物を *The Borough* (1810) に含まれる他の詩から借用することで、ソプラノからバスまでの声域をカバーし音楽的に充実させることに成功した。加えて、町の人々をコーラスとすることにより、人物の発言と町の人々の反応を同時に舞台上に示すことを可能とし、ある種の irony を作り出していると分析された。オペラ *Peter Grimes* のどの場面にも描き込まれた町の人々の偽善、悪意、無関心は、Britten が同性愛者であるために社会に居場所を見つけることが困難であったという自身の経験の反映とする見方があるが、そうではなく、Crabbe の原作において背景に押し込まれていた社会の問題—救貧院からの子どもの売買、徒弟制度、地方の裁判の恣意的なあり方、道を踏み外した人へのケアの欠如等—を、Britten が前景化して見せたのではないかと水野氏は述べられた。つまり、「Grimes の罪 (the Crimes of Grimes)」とは、「社会の罪」なのではないか。またハーディと Crabbe の関連性として、ハーディは多数いる自身に影響を与えた作家のひとりに Crabbe を挙げており、Helen Lange は両者の共通点は、大学へ行かず見習い期間があったこと、文学における有力者に積極的なコンタクトをとったこと、作品における地方性、ふたりともロンドンが快適でなく地方へ帰ったこと、作品世界の暗さであるとしている。さらに水野氏は、「自ら招いた不幸や共同体への不適合から生じる狂気」を描いている点も、両者の共通点として挙げられるのではないかと指摘された。

すべてのプログラムが終了し、金子幸男会長が閉会の辞を述べられた。その後、別アドレスの Zoom 上で懇親会が開かれた。協会事務局、庶務をはじめ、大会運営にご尽力された皆さまに心よりお礼を申し上げます。

## 事務局よりのお知らせ

### 会費納入について

今年度の会費納入をお願いいたします。会計年度は4月から翌年3月までで、年会費は4,000円です（学生・大学院生は年1,000円です）。当協会の会費は、長年にわたって値上げをしておりません。ほかに維持会費として、任意の一口1,000円のご寄付をいただいています。とくに、役員の方は、ご協力いただけますと幸いです。なお、顧問の先生方は一般会費のお支払いは不要です。

なお、会費を3年間滞納なさいますと、退会扱いになりますのでご注意ください。

日本ハーディ協会の振替口座番号は00120-5-95275です。会費は、郵便局からお振込みください。2022年度より『協会ニュース』がデジタル化されますので、会費納入用の振替用紙は9月の『会報』送付時にお送りいたします。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

## 登録内容の変更について

勤務先の変更、転居、送付物の送付先住所やメールアドレスの変更など、登録内容に変更が生じましたら、お手数ですが、事務局までお知らせいただけますよう、お願いいたします。

## 次回大会について（研究発表募集）

次回第 65 回大会は、今年の 10 月 29 日（土）に、名古屋大学（愛知県名古屋市千種区不老町）にて開催されます。研究発表にご応募の方は 4 月 30 日までに、①発表要旨：日本語で発表される場合は 600 字程度、英語で発表される場合は 150 語程度、②カバーレター：発表タイトル、お名前、所属大学・機関、身分、連絡先（メール・アドレスを含む）を記した用紙、③略歴表、の三点を、郵便または電子メールにて協会事務局までお送りください。発表時間は 25 分で、ほかに 5 分程度の質問時間を設けます。簡単な審査のうえ、ご依頼いたします。多数のご応募をいただけますよう、ご期待申し上げます。

今回の大会でも特別講演とシンポジウムを予定しております。特別講演の講師は、大石和欣先生（東京大学総合文化研究科教授）をお願いいたしました。ロマン主義文学、イギリス詩研究（18～19 世紀）、18～19 世紀イギリス社会史・思想史研究がご専門です。「*Far from the Madding Crowd* に Helen Allingham が寄せた挿絵を軸にコテッジ論を展開できればと計画しています」とのお言葉をいただいております。

シンポジウムは、「ハーディと進化論」（仮題）のテーマで清宮倫子先生（元茨城キリスト教大学教授）が中心になってご準備いただいております。パネリストは清宮倫子先生のほか、Neil Addison 先生（日本女子大学准教授）と藤田祐先生（釧路公立大学教授）です。Addison 先生はハーディの詩、藤田先生はハーバート・スペンサーを中心とするイギリス思想史がそれぞれご専門です。発表言語は Addison 先生が英語で、清宮先生と藤田先生は日本語でなさいます。内容のみならず、形式も英語と日本語による発表ということで大変チャレンジングなシンポジウムになることと期待されます。

内容等の詳細は次号の協会ニュースにてお知らせいたします。

## 《内外ニュース》

会員の訃報：

2022年2月12日、深澤俊先生（中央大学名誉教授）がご逝去されました。深澤先生は4期(1994～2002年)にわたりハーディ協会会長を務められ、その後も協会顧問として協会に多大な貢献をされました。茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

会員による著訳書：

大嶋浩編著『日本におけるマライア・エッジワース書誌』（大阪教育図書、2020年3月）

大嶋浩編著『日本におけるジョージ・エリオット書誌・増補改訂版』（大阪教育図書、2020年5月）

藤田繁訳『ダニエル・デロンダ（上・下）』（彩流社、2021年9月）

玉井暉編著、清水緑、西村美保ほか共著『魅力ある英語英米文学』（大阪教育図書、2022年1月）

## 《編集後記》

今回の第 91 号から日本ハーディ協会ニュースはデジタル化することとなりました。今まで年に 2 回（4 月と 9 月）協会会員の皆さまへのお知らせと共に紙媒体で郵送されていた協会ニュースですが、印刷費や郵送料などの経費削減を目的として、今後は協会ホームページにアップロードする形で公開することとなりました。この決定については、2021 年 10 月 30 日に Zoom 開催された日本ハーディ協会第 64 回大会の総会でも報告されたとおりです。なお、従来どおり紙媒体での協会ニュースをご希望の会員の方は、日本ハーディ協会事務局までご連絡頂ければ、必要部数を郵送させて頂くことになっております。

この決定を受けて、印刷所を介さない個人での編集作業に戸惑いながらも、90 号越えという長きにわたる歴史をもった協会ニュースを少しでもいいものにしようと取り組んできました。デジタル化するにあたり、HP 上で閲覧しやすいデザインに変更することも検討しましたが、やはり目にしたときにこれまでどおりの馴染みのあるデザインを踏襲することを優先しました。フォントや文字間隔を、印刷所で組んでもらっていたときのように揃える作業は、地味ながら骨の折れるものでした。「何も変わらない」デジタル版協会ニュースをお楽しみ頂ければと思います。また、今後のデザインについては、会員の皆さまからのご意見をお聞かせ願えれば幸いです。

ご多忙の中玉稿をご執筆くださいました方々に、厚くお礼申し上げます。また、今回は自主的にご寄稿くださった方々にも恵まれ、多数の執筆者による充実した内容となりましたこと、重ねてお礼申し上げます。

次号は 2022 年 9 月発行予定で、原稿の締め切りは 2022 年 7 月 10 日です。論文、随筆は 2,000 字程度、短信、個人消息は 500 字程度です。どうぞ皆さま、奮ってご寄稿ください。また、ハーディに関する著書、翻訳等につきましては編集者までご連絡ください。お待ちしております。

---

日本ハーディ協会ニュース 第 91 号

HP 公開日 2022 年 4 月 1 日

編集者 麻島 徳子

---